第五百廿三號目次

◎社說
愚なる者よ汝が播く所の種子先づ死せざれば生きず
富國强兵の基礎
体面を論ずるは小國なり
公德養成の虛僞

◎女學
太閤秀吉の母
三代目
相續者は女か男か
動物虐待防止會
料理道……生間正起

◎光瀾之觀
精神……奥邃

◎雜錄
舍監の四ヶ月……有美
宇宙と人生及靈魂に付て……黑岩周六君
定見深睡錄
古代の女子觀……赤司嚼花

◎時事
學生時期の女子に諗ぐ……原田松巖

◎隨感
先哲は花の如し

第五百廿二號(八月十日)目次

◎社說 大名學問◎團十郎と芝翫◎嗚呼圓朝子
◎事業演劇同一の辨
◎隨感 子供の手形○文かく道
◎女學 胎育
名古屋をんな論……青柳有美
料理道……生間正起
◎光瀾之觀 記錄……新井奥邃
◎雜錄 モッアルトの臨終……赤司嚼花
水かゞみ……左學女
手紙のうつし……八王子隱士
◎時事 ○支那人の喧嘩○大隈大學○相撲何故に人氣ある呼○常陸山○外國傳道會社○其雇はれ人○獨立は如何

第五百廿一號(八月十日)目次

◎社說 時大小觀(催眠術容易く行はる)◎醫術甚だ効なし◎華族居邸の煉瓦塀◎待合風茶室◎復活に非ず新生なり◎讀書人及び事務家◎音樂會と教會堂◎離間流言橫行す◎支那人の外國保險會社◎戀愛談、成功談)
◎隨感 松の化粧◎秋天の痴雲◎戀ひしき蟲よ◎月よ、月よ◎月の恥かしさよ◎秋のねがひ◎活動の猫◎紅顏の美少年◎鳥部山の煙、あだし野の露
◎女學 女學生の不女才
昆蟲學と家庭……名和靖
料理道……生間正起
◎光瀾之觀 記錄……新井奥邃
泉邀團体の側面觀……某
◎雜錄 舍監の四ヶ月(二)……青柳有美
花子のなげき(完)……中島相煙
宇宙と人生及靈魂……黑岩周六
自然と人工……左學女

期日	前金		廣告料			送金
每月二回(十日、二十五日發行)	壹冊定價 拾錢 半年分前金 壹圓 一年分同 貳圓拾錢	代金は惣して前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事 但し其節は惣て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ氣に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かれて御承知置被下度候	一行(十七字詰)一回 前金拾錢	一段 同 三圓半	一頁(三段) 同 九圓	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は惣べて一割增にて計算せられたし

大賣捌
東京 東京堂
西京 勉强堂
大阪 文潤堂

明治三十六年十一月十日印刷
明治三十六年十一月十日發行

發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
(特電番町千一番)
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所 株式會社秀英舍
(新橋電話十八番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第五百貳拾參號
明治三十六年十一月十日發兌

社説

愚なる者よ

汝が播く所の種先づ死せざれば生きず

むかし聖ポウロ、慨然として斯く言へり。是れ、信仰の言なり、赤誠の言なり、英雄の言なり。

例へば、紛々たる土砂を積み重ね、其の山を高くすることによりて、是れより黄金を産することを得べき乎。例へば、落々たる岩石を積み重ね、其城を堅くすることによりて、是より人間を生ずることを得べき乎。

「生なき者は、生ある者を生ずる能はず」。十九世紀の科學者は之を確證せり。而して、二十世紀の人尙ほ之を信ずる能はざる乎。安くんぞ、無より有を生じ、肉より靈を生ぜんとするの愚を休めざるや。

鐵槌を揮つて堅鐵を打てば、鐵、火を發す、此の火、何處にありや。鐵槌に在りと言つて之を揮はず、堅鐵にありと言つて之を打たず、而して火を求むとき、火安くんぞ閃かん。

泥中に蓮あり。蓮種先づ死せざれば、其核伸びず。其核伸ぶ、日光溫ためざれば、其莖長ぜず。其莖長ず、天使下り、地粹上り、胡蝶舞ひ、美神抱かざれば、麗はしき其花、何を以て莞爾として打笑ことをかせん。

此故に、天地萬物ありと雖ども、其神一なり、人間百躰ありと雖ども、其精一なり、社會複雜なりと雖ども、其道一なり。

もし能く其の必須の物を握らば、天地至つて簡、人生亦至つて約、豈に穰々雜々の多岐あらんや。聖者、乙女に告げて曰く、マルタよ、マルタよ、汝、多くの事によりて心勞れせり左れど無くてならぬものは、唯一なり、と。老子、亦た孔丘に敎へて曰く、公先づ其煩心を愼しめ、無る可らざるもの、唯一なりと。希臘の先哲より、天竺の覺氏に至り、八百萬神より、唯一神道に至り、古の英雄より、今の烈婦に至る、東

西古今其の揆亦一也。

則はち窃かに古來萬國の先覺に觀るに、彼等が爲す所ろ、豈に多ならんや。劒を抜いて心を貫ぬく。身を投じて肉を食はしむ。唯則はち是のみ。棟梁の材、多きにあらず。心魂の血、多きにあらず。決死の言、多きにあらず。確信の神、多きにあらず。豈に多あらんや、唯一、これ耳

外交の辭令は、君子國の式法なり、之を文飾するに於て害なし。然れども、無てならぬもの、豈に多ならんや。一誠、不レ可レ已所に決せば、曠日彌久の遷延を要せず。樽俎未だ陳ぜられずして、大事既に了すると古より之あり。

此故に、一誠先づ動かざれば、百事動かず、一意先づ決せざれば、百事決せず。囂々たる名論卓識あらんよりも、一死能く群議を排する、この故なり。左れば、「汝が播く所ろの種先づ死せざれば生きず」と知らず。未だ先づ死するもの無して而して他の生を求めんとするものを、愚なりと言ふ。

左れば、子を叱するの母が、單に牛乳と、空氣と、育兒法とによりて、英雄を舉んとするも、安くんぞ得んや。良人に諫止せんとする妻が、料理と、洗濯と、家庭術とによりて、賢夫を復さんとするも、安くんぞ得んや。母は、子の爲に死すべき也。妻は、夫の爲に死すべき也。彼の生を求めて、而して我先づ死せず、何を以て得んや。

二

吾人は此の意義に於て彼の離婚を惡む。凡そ、婚姻は强ゆ可らず、然れども既に婚すれば斷じて離る可らざる也。況んや一方の欠點に嫌ひ、之を忌みて離去せんとする如きは、人の尤とも冷、太はだ弱なるもの也。何んぞ、大いに決する所ろありて而して斷乎として之を革正せざる。

此の意義に於て、多くの傳道と、多くの教育との、極めて効なきとに歸するものあり。其の聽衆と其の門弟とに訓示する所ろ、喃々たり。其の附與する所の智識、天の高さより地の深きに至る、巨細諸さず。而も、其の與ふる所ろ、口頭より發し、頭腦より發し、皮膚より發し、面相より發するのみ、更に深く、更に熱く、更に濃く、更に一なる決死獻牲の所より發するとなし。即はち、彼等を導きて勸工場に入らしめ、彼等に多くを見聞せしめて、而して一方の出口より出ゆかしむ。彼等が入場せし印しに、頭らに水そゝぎ、乃至、胸に卒業證を掲げしむ。斯の如くして、彼等の心血は依然なる舊人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なり、彼等何等の新生命に觸れたるとなし。而して此れ傳道教育なる乎。

嗚呼、人生多忙なりと云ふと雖ども、大事豈に必らずしも忙ならんや。千門萬戸の人の口、萬語千言なりと雖ども、大事を決するもの、豈に多語ならんや。空言風に吹いて秋葉の如く飛び、論議道に敷いて砂石の如く散る。一是非、一是非を追ふて、終日沈默なく、日々印刷する所、天下の雪に墨するよりも黑し。斯の如くして、人間は生れて又死し、辯じては又論ず。資本金を入用として、外資輸入論あり。智識を入用として、洋行するものあり。其の忙はしき爲に虛弱し、牛乳とソマトーゼを主張す。彼等終日斯の如くして、日も亦足らず、夜亦眠らず。役々過神經に激して、又藥を求む。而して後ち新人の新事業なるもの、幾何か成れる。嗚呼是れ他なし愚かなるものが、汝の播く所ろの種子先づ死せずして而して新生を求むるの故也。

天に屬するものの形躰あり、地に屬する物の形躰あり、天に屬する物の榮は地に屬する物の榮に異なり、日の榮あり月の榮あり、星の榮あり、此星と彼星と其榮また各ゝ異る。

富國强兵の基礎

維新の當初以來、新日本建造の元氣尙ほ勃々たりし間は、志士をして昂然として任ぜしめたる邦家の大策槪ね一なりき。曰く、『富國强兵』の道、果して如何と。

蓋し、此語を聞きて坐ろに當年の昔しに忍び、半白の老壯士慨然として淸新の氣を復する族、多かるべし。實にや、青年邦家の理想に夢みるは樂しきとなり。苦辛難に趣むくも、稀有なる愉快なり。嗚呼、『富國强兵』。汝の勇ましき名と、汝の健氣なる所望とをして、再たび青年士人の胸間に燃立たしめよ。

夫れ、外難なかつせば、國力を念はず。邦家事なくんば、富國强兵を冀ふとも薄かるべし。此を以て、敵國外患あるは、邦家の益なり。今は即ち有益の秋なり。

試ろみに問はん、富强の基礎、何處にあると。志士、之が爲めに、千百の立策ありと雖ども、惜しむらく、唯だ一の要道を欠く。是を以て、經綸大いに備つて、電力通ぜず、綱紀太はだ密なりと雖ども、其の動かざるを如何んせん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾人をして言はしむれば、斯の如し、曰く、富國强兵の基礎は信仰にありと。故に、確信を得せしむべき、教育と傳道とは、富國强兵の兩足なり。

識者もし審びらかに實相を觀ぜば、吾人が此の言を以て奇矯迂僻と爲さゞるべし。見よ、日本貿易の事、何故に擧らざる資金なきの故にあらざる也。たゞ確信なきに由る。日本强兵の事、何故に煥發せざる、兵備なきの故にあらざる也。只だ確信なきに出る。

而して、日本人に傳道教育を施こすものは、西洋人に於けると反對すべきことを忘る可らず。日本人は、其の先天に於て文明なり、西洋人は、其資質に於て蠻勇なり。此故に、西洋の基督教は之を文明にし、西洋の教育は之を紳士貴婦人にせり、西洋の傳道教育に「カルチユア」を主とする亦旨ある也。日本人に對するもの豈に之と同じかるべけんや。

風光明媚の天好に人となり、清澄高朗の月夜に物思ひし、菜食し、魚食し、櫻花にかざし、朝日に散り、武士道に潔よくせし日本文華の先天的文明者は、其の傳道と教育とを以て此上に更に文明的となる可らざる也。我國に於ける今後の精神的感化は、二の標語を要す。曰く、蠻勇、曰く、確信。是なり。

四

一代の哲人もし此の實相に觀じ、大綱を提さげて小紀を畧し偉然として、此の精髓に傳教するとあらば、富國强兵の事、自づからにして成らん。昔しは、佛道の先哲、既に此の秘義に試ろみたり。今の佛者の如きは、たゞ其の餘弊あるのみ、此を以て彼を推すは愚なり。見よ、日本人の尤とも富み且つ尤とも强かりし時に、確信なき時代ありし乎。

躰面を論ずるは小國なり

廉恥は士の生命なれども、餘りに拘々として執着するは、大丈夫の事にあらず。昔し、小藩の士、やゝともすれば、躰面を論じ、忽ち帶刀をひねくつて、武士の面目立ちがたしなど息巻しが、大藩の士は居常茫漠として、甚はだ感ぜず、屢ば恥辱らしきことに出て合ふも一向に氣に留めざりき。左らば彼の忽ち慷慨する士らひは、能く終り迄て耻を辱ぐかと見るに、必らずしも然からず、目前の小恥、忍ぶ能はずして忽

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

まち抜刀し、二三者を巧みに切倒して、見物人には賞めらるれども、家名断絶し、妻子沈落し、祖宗嗣を断ち、遂に何等の得たるとなく、只だ癇癪士らひの名を殘すある耳。

試ろみに之を當代の列國に就て一考すべし。昔しの封建は、今の萬國なり、今の小國は則はち昔しの小藩に非ずや。運りに躰面を論じて、やゝともすれば、世界に恥かくなど言ふものは、大國の氣象なる乎。

ソクラット、人の罵るを聞き、靜かに曰く、其の評言は我に當らずと。凡そ偉人の自から見る斯の如し、豈に神田ッ兒の直ちに躰面を論ずるに比すべけんや。

夫れ、人の大なるものは、躰面を思はず、其躰面が他人によつて損せらるべしとも思はざれば也。國の大なるものは、躰面を論ぜず、其の躰面が他國によつて增減せらるべしとも思はざれば也。

見よ、魯西亜は如何に屢々躰面を傷つけられて而して尚ほ恬たる乎を。其近世の外交史は、大抵、躰面破損の歷史也、彼は常に躰面を損じつゝあり、何時にても、其主張を變換し、又何回にても、其の奪ひしものを取返されつゝあり、而して後ち遂に其の領土は擴張し、其の利益は增加しつゝあるに非ずや。

公徳養生の虚僞

二三年來、公徳養成の叫びあり。是れ餘りに亂暴なりし社會にあきれ果て、一隅健全分子の凛として抗抵せし餘勢に出で亦た祝すべき現象に相違なしと雖ども、少こしく其の流行するや忽まち摸倣者あり、一種舶來品に渴仰すると同樣の高襟主義によつて、徒らに形式的虚僞者を生ず、寧ろ嘔吐すべきに非ずや。

記者一日、某と談ず。彼揚々として曰く、吾輩の家族は未だ曾て劇場に入らずと。記者の如きは殆んど噴飯に堪へず、當時寧ろ其の沒趣味にあきれ果てたりと雖ども、豈に圖らんや、其實彼等は密かに劇場に入り、至つて其の消息に精はしきものならんとは。彼等一派の所云ゆる公徳論なるもの、大率ね斯の如き類なり。

夫れ、公徳は私徳の煥發、個人徳美の反映なり。假令ひ公人

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の惣ての私德に於て其完きを望むべからずとするも、必らずや現に健全强固の德人あつて、激して公德養成に當り、其の眞摯純正の品格を挺して、汚穢醜劣の俗風と戰かふとあり、眞に此の根抵あり赤誠ありて而して後ち叙むろに反響影映し遂に自づから穩健なる公德を養成すべし。此に於てか社會に反動を生ぜず、奇矯の繼兒も亦出でざる可し。然るに輕薄子、單に西洋諸國に摸倣して、偏へに彼國風を美なりとし、突飛、外形に拘泥して、虛僞なる修飾に力めなば、此時に當つて反動するものは、反つて强健なる德人、所云ゆる躰面小恥に頓着せざるの激兒なるべし。眞に公德に顧慮するものは、寧ろ此邊隱微の情變に、掛念せざる可らざる也。

今や、公德養成の叫びの大なるに笑ひ、其の主唱の滑稽なるに嘲けり、眞摯の人反つて之に遠ざかりて、高襟摸倣の輕薄子が常職と見做し、其の論の彌よ高尙なるに隨がつて、其の調の彌よ虛僞なるに歎ぜんとす。森嚴なる公德を論ずるものに於て此の變調を歎ずるは、豈に當代の悲愁に非ずや。當面の論士、須からく一顧を煩はして可なり。

女　學

太閤秀吉の母

太閤秀吉は、誰の子か、其の顏、猿猴に似たりと言へば、即はち猿猴の子か。進化論より申せば、どうせ御親類には相違なからんが、此子非常に進化せし所より考ふれば、ちと緣遠きが如し。イヤ〳〵顏の猿猴に似たるにあらず、智慧のはしこく、頓智の利きたるを喩へしものと言ふ人あり、左すれば中村の土百姓の子には不似合なり。何れにせよ、かゝる大豪が忽然として農家の中に生れ、其血統と遺傳を尋ぬるに於て古來甚だしく人を苦しむ。朝鮮より使來つて、太閤の素性を尋ねしとき、サスガの家康まで大きな頭をかゝへて苦心したり。太閤笑つて曰く、其の初はイザナキ、イザナミの尊、以後は知らずと。斯樣に申せば、當座は相濟むとも、敎育者などは生徒に問はれて困るとあり。左程まで、遺傳は當にならぬものであります乎と。よつて玆に、太閤の母を說く。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或人曰く、太閤の母かつて宮仕へして、其頃ろ密かに懐姙せしが日吉丸なりと。然し乍ら、之は馬鹿々々しき古事附なり。第一、太閤の醜男子たるによりて、其種が、西京の公卿に出でざるを悟るべし。よし又、公卿を父としても、太閤の父として相應しきほどの男は何處にありしや。もしもかゝる男が京都に居らば、足利氏の末今少し面白きことありしならん。左すれば、父を大宮人と説きたりとて、不審は同一の不審にて、反つて面白くなきと一層なり。吾輩は信ぜず。

吾は直ちに太閤の母を尊とむ。此の母は、かの子を生むべき母なりし。此の女、如何なる人物なりし乎。歴史家は益もなき造り事を列べたつれど、一切信ずるに足らず。反つて、零細なる一二の逸話を活かして遙かに惟んみれば、此の女眞とに驚ろくべき女丈夫なりしと覺えたり。

彼女は、日輪を夢みて日吉丸を生めり。夫れ、日輪を慕ふそは、萬葉時代の日本人にこそありつれ、其後のやさ男、豆男、色好み男などには殆んど無きとにて、女には特更なし。然るに此女、赫々たる太陽を敬慕し、寤寐之を念ふ、其の心胸の快濶にして、理想の焔々たる、大望野心天を蓋ひ、一生の抱負有髯男子を物の數ともせざりし氣慨、目睹る如し。

而して、此の男らしき、岸丈なる未亡人が、如何に優しく、如何に濃やかなりしかは、其子太閤に移りたる多情多恨の資質によつて、推し考ふるに餘りあり。未亡人後ち再たび嫁して兒を擧げ、此兒、少々平凡的に溫和しかりし故、日吉丸の剛情にして負けぬ氣性は、繼父に好かれず、早くより家を出て遊びあるき、遂には藥を脊負つて行商し、泥棒、ばくち打、ゆすり、遊び人等と亂暴なる附合を爲るうちにも、母を慕ふ心は雪の朝日に溶くる如し。而して母が子を思ふ濃情多恨も亦た戀人の如し。貧苦狼籍の間だにあつて母子が如何に相愛せしか。言語粗暴、態度蠻野の間だに、眞情の流露如何に美はしかりしかは、千百歳後の人をして殆んど泣かしむるに足れり。

左れば、太閤、位人臣を極め、氣、宇宙を呑み、英雄を駕御して小兒の如く、四百餘洲を吾物として早や分割に工夫せし折柄にても、母を慕ふと赤兒の如く、母の前には、冠も位の威嚴もメチヤ〳〵なり。征韓の役半途にして、母の病とき〻飛んで大坂に歸りしあわて工合を見よ。此兒をして彼の如く

ならしめたる母は尋常の婦人なる乎。

世に親孝行を貴むるものあれど、親孝行は、子孝行の故に出來るもの也。たとひ、飲んだくれの亂暴ものが、鷹の子を生み、親に似ぬ孝行ものが出來たりとも、よく〳〵視察すれば其親の醇粹、好人物、濃情等が、孝行者を作りしなり。親に子を愛するの情乏しくして、子が先づ孝行の眞情に滿るは世に稀なり。もし之あらば、ソハ敎育より成れる德義にして、自然の天眞にはあらざるべし。

かの太閤秀吉は、天眞の人なり、其言動傍若無人、總えて、敎義などに拘づらふとなし。彼が母に於けるは天眞にして、自然なり。彼は其父に對して慕へるともなく、墓を建たるともなし。彼をして斯の如く其母にのみ敬慕せしめたる所以を見て、母の如何なる人物たりし乎を推考するに足らん。太閤は其母によつて生れたり。遺傳と敎育の理法こゝにも顯然たり。世にもし斯の如き婦人あらば、たとひ其夫は百姓なりとも、猿に似たる醜男子なりとも、優に第二の秀吉を生むに於て不足なかるべし。つとむべし、女丈夫。隆んに、太陽を望んで、盛んに太閤を生み玉へ。

三代目

石[illegible]

「賣家と、唐樣で書く三代目」。一家の興廢は大抵三代目によつて決るもので、もし三代目の當主に其人を得ざれば家は必らず亡びる。大は、王家將軍の繼續より、下は町家百姓の末に至る迄、皆な此の情理をもれぬものである。元來、一家を起すと云ふとは容易ならぬとにて、必らずや多少英雄の資を存するものにあらざれば出來ぬとである。たとひ、目には一丁字なく、口には漢語の一つだに使へぬ無學文盲者なりとも是非、何處かに凡俗と違つた元氣を存し居るに極まるもので、朝早く起きると云ふか、何年禁酒すると云ふか、何程より以上の小遣を使はぬと云ふか、附合にも商賣にも奪ふ可らざる一定の規律を設けて、嚴然として之を確守する爲體は、宛がら英雄の態度である。人は往々之を些細の事の樣に言ひ做せども、之を實地に行なふことは、至つて困難のものにて、一時感情の激昂して人の出來ぬ大したとを決行するよりも、寧ろ此の日々に行儀を勵行するが六かしきものである。左れば、一家を起して其の基礎を据えたる老人などを能く視れば

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眼光のくばり、腰の据え方、音聲の落付、態度の沈着、あつぱれ人物の風采を存し、銅色のむくつけき田舍風の下より、チラ〳〵と英雄の色合を輝やかすものである。

然し、此の英雄も、無學の悲しさ、とんと思ひ遺して存外の失策を爲すヿあり。即はち、孫の教育に心を凝めずして、折角の家宅を三代目で打こわし、乃翁の墓尙ほ新らしく、一杯の土未だ乾かざるうちに、早くも一門離散の悲境に陷いるヿあり。所詮は、孫の教育を怠たる故なり。

抑そも初代の英雄は前に述べたる如くにて、此の英雄なかつせば、新家は起らざりし也。然るに、第二代即はち此の親仁の子息の代には、親仁も尙ほ生存して陰ながら世話を燒き、又、親仁の創業に助けたる手代番頭出入の忠義者もありて、陰に陽に助勢すべし。況んや、第二代の當主が幼年の頃ほひは、初代尙ほ創業の最中にして、經營困苦一と方ならず、少年の頃より篤と其の狀態を實驗して、世のせちからさをも親しく見聞せり。又、親仁の質素勉强の家風にも慣れなれて、自づから忍耐辛棒の氣風も出來居る筈ゆゑ、二代の當主は、生來左程の人物ならずとも、先々親仁の餘德と、餘波とに乘じて、兎に角、無事に世を送るならん。

然るに、三代目の孫が生るゝ頃は、初代の祖父もはや御隱居樣などと推尊され、二代の親仁もソロ〳〵殿樣などと呼ばるゝ頃ゆゑ、幼年の時より、牛乳、日傘に育てられ、身躰も先づ虛弱なるべし。寒き風にも當てざるほど故、人情の冷酷には固より當らず。大事に〳〵せられて、いよ〳〵馬鹿にせられ。學問は學校で習ひ、人世は、お世辭で覺え、人は皆なお辭義するもので、世の中は樂なものと高をくゝりて伸びたる人物故、生長して後ち馬鹿になるヿ無理ならず。此の男三代目となりて、一家興亡の機を處理するヿ、如何んぞ得ん。

夫れ、三代目は興亡相岐るゝの機なり。初代の男は、どふせ多少無理をして、人を泣かせたるヿも有るべき故、其の怨は今や頭をもたぐべし。初代よりして三代目迄は、少くも五十年、即はち社會の大勢大に變ずる時なり。左なきだに、一人物あつて、初代に劣らぬほどの見識と辛棒との入用なる時にもしや前に述べたる如き馬鹿ものにては、家を破らんと言ふを待たず。

此の家の興廢より申せば、氣の毒なれど、一盛一衰は、人生

の勘定にて、人を快ちよくする風の變化なり。家十代と續く名家には、仁人あり、賢者あり、貞婦あり、忠僕あり、此等の人物天の祝福を得て、辱けなく恩澤を頂戴するもの故、あだをろそかの輕薄にては、藁火の忽ち消え、藁の灰の忽まち冷ゆる如きが常とこそは心得べきなれ。

相續者は女か男か

もし女の兒が二三人ありて男の子一人ならば、親は何となく心さびしく、萬一、男の兒が死なば、家の相續人は無くなりし樣に思ふとあり。之は、當然なる乎。

男の兒なりとも、嫁は他人の娘を貰はざる可らず。半分は、他家の血を混ずるにあらずや。娘に聟を取り、聟は他人の子なりとも、娘は即はち吾が子なり。半分は吾家の血を存するにあらずや。然るに、男の子ならば、吾が血統を十分に相續すると思ひ、娘ならば、ただ何となく覺束なく感ずると、習慣とは申せ、奇怪の事なり。

幕府封建の時代には、家を續ぐもの男子に限れり。今にても上つ方には、此の習慣のこれり。左れば、法律上、及び社會上に於て、男子をのみ相續人と思ひ做す習はせは、聞こえたれ共、血統遺傳の上にまで、矢張り男子をのみ賴みとする心地のするは、遂に迷ひに非ずや。

腹を借り物とせしは、古しの事なり。種子斗りにて、畠の善惡に關せずと思ひしは、農學の開けぬ時なり。生物學の示す所によれば、父母兩人の可傳分子先々等分に混和して、新たに一兒を擧ぐ。此兒の享くる所、父母兩人の血統を傳ふとせば、男兒なりとも、女兒なりとも、吾が血統を傳ふるの上に於ては、損益なきに非ずや。然るに、つねに、男兒の方にのみ多く傳はりたりと思ふ誤解は、何故ぞ。

もし仔細に其の分量を比較せば、眞に吾が血統的性質を傳ふるものは、男兒よりも女兒の方に多し。即はち、血統の上の相續者としては、男よりも寧ろ娘の方をこそ多しとすべきに普通の誤解は之に反對せり。

何故、娘の方に多きやと言ふに、娘は十ヶ月の胎育と、初數年の家庭敎育とにより、其子に附與せし母方遺傳の性質を十分に發展せしむ。即はち其の子に與へられたる母の性質（娘

の家の血統）と、父の性質（良人即はち他家の血）と等分なりとするも、母の感化は父よりも強烈なるが故に、母として與へたる其遺傳性を發展せしむること必らずや多し。凡そ人の子が大抵母に似ること多きは、取も直さず、母方の遺傳を多く發展したる譯にて、即はち娘によれる遺傳相續の、反つて男兒によれるに優る證明なり。左すれば、吾が血の相續を慮ばかるものは、娘をこそ多く賴みとすべきなれ。もしも、男子二三人ありて、娘たゞ一人ならば、多く遺傳すべき吾兒はたゞ一人なりと感じて、宛かも今の男兒に付て憂ふること同樣にこそ思ふべけれ。今の普通の感情は、事理を顚倒せり。

此の理由によりて、明白なる他の敎を得べし。即はち、女兒を十分に敎育せざるものは、家門の隆盛を續ぐこと能はざること是れ也。單に男子をのみ敎育して、娘は放擲し、どふせ、彼女は他家にゆくべきものなどと思ふは、今日の世にも似合はざること也。日本は膨脹して大陸にも推出すべし。各家の家の子は、他家に嫁して、其家の子をも吾子にすべし。勢力區域の擴張を希ふものは、娘を十分に敎育して、吾が一生の潛勢力を他の門戸内にも發展せしむべきなり。

動物虐待防止會

今は、動物優待の敎には御一新のあるべき時なり。

是まで日本人はなか〳〵動物を優待したり。乞食に親切なると同日に、動物に親切なりしとは、萬國中恥かしからぬ文明なりし。

こは何によつて斯る發達をせしぞと言ふに、日本人本來の慈悲心其の根抵たりしは言ふ迄もなけれど、必竟は、佛法の敎ゆる所ろ恰かも國民の特質に和合し、斯くも美はしき習慣を造りしとは見えたり。

試ろみに、謠曲、戯作、淨瑠璃、物語などに現はれたる生物觀を見よ。さま〳〵の動物植物、權りに姿を變じて人間となり、ゆかしくも夫婦親子の緣しを結びて、斷つに斷えぬ恩愛執着の羈に續がる。其間、同情同血の思ひ、人と動物との間だに結ばれて、彼を非常無緣の畜生とは思はれず、たゞ何となう可憐に不愍に感ぜらるゝ所以のもの、主として佛法に因める文學の人心に影響せし爲め也。

故に、日本人は存外、動物虐待の心うすし。西洋人の亂暴な

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

るこそ甚はだしく此の種の會合を要するならんが、日本に於てワザ〱斯る催ふしせんと、只何となく西洋のまねするに非ずやと疑はん人々のあるも一應は尤も也。

左れど、此の一應の理に加へて、再應の理由あることを忘る可らず。前に述べたる如き文雅の趣味は、是迄淺からず日本人を感化したるに相違なけれど、此よりはちと滑稽らしくなり今後の青年を感化せんこと、覺束なく、又望ましくもなき時代となりたり。

今や理科生物の學をすゝめて、青年男女の心に自然の美法を感得せしめんとする折柄、單に輪廻同根の趣むきにて、動物を親しませんは十分ならず。かのダルヰン出でゝより、生物界の情操明白に知られ、此にも亦た親子夫婦のかたらひあることを辨知せし如く、必竟、生物學理の闡明する所ろによりて動物界の人情を發揮すること、當代の緊要ならん。

斯して、動物の感情を知り、其の愛情を知り、其の苦痛を知り、其の利益を知り、之を科學的に明識して、而して科學的に理由ある同情を表し、以て動物虐待の酷烈を自防するに至らしめんことは、一面、德育に緊要なると同もに、又、理學的敎育にも緊要なり。

此の意義に於て、動物優待の敎に今ま一維新あるべきを知り随がつて去年來世に出でたる動物虐待防止會の隆盛ならんことを祈るや切也。

料理道

生間正起

○蒸松茸　手輕き蒸方

松茸の石付を去り蟲の入らざるを能く洗ひ拭ひて空の土鍋へ全形の儘入れて炭火に架け松茸より出づる水の湯氣にて蒸し裂きて柚酢を注ぐも葛餡をかけて卸生姜にて用ゆるも可なり

○いとこ煮

中味噌の汁に湯煮したる小豆牛蒡芋慈姑其の他豆腐などを次第に入れて煮たるをいとこ煮といふなり

昔は今日の樣な理窟づくめの世にあらざるゆゑ物に名付くるに謎詰に似たること多し追々に煮るは甥々に似るといふ詞の通ずるより從弟似をいとこ煮と名付けたるものなり理窟に偏

したるよりは面白し序に牛蒡のことを聊か説んに牛蒡に牡と牝とありて牡は根も莖葉も眞直に成長して其の勢ひ甚だ勇壯なり故に雨に風に旱魃にも沮む色なく成長肥大すること極めて速かなり牝は根も莖葉も大抵横に蔓りて其の勢ひ柔弱にして風雨旱魃時には必らず莖葉萎靡して堪へざるの状を呈し而して其の生長も甚だ遲くして根に椏を生じて上品ならず故にこれを作るものは必らず牡種を撰ぶ種も亦一見して牝牡を別つことを得、牝は本來相同じと雖ども牡は蔕付の方少しく細長しこれを作るには粘土をよろしとす

上品なる牛蒡は根能く肥太り中心も亦能く充實して此れを喰ふに齒に脆くして其の味美なり

下品なるものは如何程肥太く長く成長なすとも中心に空虚の處多くして外園の肉前者に比すれば硬くして其の味美ならず

○鯛麥込蒸

鱗をふき鰓腸を取り脊開きにし腹をよく洗ひ水を滴し中落(脊骨)ふを取り鹽を少々撒りかけ暫く置きよばし麥を詰めて能く蒸し順次に煮汁醤油を入れ小皿に辛味大根葱の小口淺草海苔山葵などを入れて出すべし是は尤も鉢肴物也

○掛菜汁

掛菜とは常の干菜のことなりかけ菜遣ひ様は菜の莖付より二寸許切去り其儘熱湯に漬け蓋をして暫らく置き湯のさめたる時分に其の湯にて能くもみ其の湯をすて丶外の湯にて一度洗流し三度目の湯を十分の一程汁へさしたるがよし葉の中央にある心もたち去り箸に掛る程の大きさの色紙などに切りたるがよし

仕立様は赤みそと白味噌とを等分に摺合せよき煮汁にて薄く鹽梅をなし汁煮立たらばかけ菜を入れ煮過ぎざる樣にすべし

○長芋味噌漬

長芋を小口より五分許に切り水に漬けぬまりを能く取り中味味噌に酒を合し桶の內へ一面に敷き其上へうるしこしの紙を敷き其上へ右の芋をならべうるしこしの紙をきせ其の上味噌を一面にならべて少し重き落蓋を置くべし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

光獨之觀

精神

奥 遂

精神は本也、本立て道生る、精神は大也、先づ其大なる者を修めて小なる者之に從ふ、諸論者若し自ら精神に顧る無くして唯だ其事端を衆中に平等ならしめんと欲せば、是れ其本を揣らずして其末を均ふする者、獨り其功を奏する能はざるのみならず又其反覆の結果を致すもの知者を待て後ち知るべきに非る也。

害毒深く精神に入れば、或は皮膚圓滿なるが如しと雖も其人死なむ、此れ咇唎噻學者の永く不救に沈淪せる所以也。

徵候は變ずべきも其病は更に懼るべし、若し醜慾にして其心に原せば痕跡或は一時に隱沒すと雖も狂病變症の後見再發するは免がるべからず、慾心此に隱れて彼に仕する者は無病の躰に非る也。

今ま私我を以て我を攻る者は固より無我を期すべからず、其慾界の皮膚は假令ひ今日に文飾するを得るも明日其皮を剝ぎ其肉を去り而して截りて其神髓に入らば其醜臭果して如何んぞや。

世に精神と叫ぶ者も亦頗多し、啻に其細大精粗の不同あるのみならず、又啻に其單複卑高の差異あるのみならざる也、今夫れ吾が庭前の空氣は氣也、市街の空氣も氣也、電氣は氣也人氣も氣也、皆此れ氣なり而して何ぞ其異なる如此の甚しき、所謂精神なる者に至ても亦然り、而して更に正邪善惡眞假虛實の甚しき有り、今暫く其一端を擧げんか、或は我意滿々として競爭自ら勉むるを以て精神と想する精神なる者有り或は靜寂沈潜にして兼愛又は無愛を以て天心と誤謬する精神なる者有り、或は情を殺し世を詛ひ慈善の面を蒙つて譎詐を行ひ以て文明と吠る精神なる者あり、之を推すに其類甚だ多し、而して此の者何ぞ曾て生命の生息に關せんや、故に古に云く、「我れ爾と何ぞ關せん」と。夫れ誠なる精神は獨り貴神の生息に於て存す、而して精神全躰の變化精妙なるは其貴神の生息を通じて萬有の開發に沒る有る無きが若き也、但たし人其個人たる如きは如何に盛德大業たりと雖も亦只た其一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小微分を有するのみ、而して此れ畢竟客體たり、貴神の本分子に非る也、神自ら出でて神に屬するもの也、即神の分子に非ず、是れ神に於て生く。

貴神は惟一生命たり、即ち惟一生命は貴神たり、故に神に由るに非れば以て生命を有つ能はず。

嗚呼此の生命や、知者は其知るべきを知るのみ、又「言」を以て之を稱す、而して其意盡くす能はず、尊んで聖言と謂ふは貴神の言を謂ふ、即ち眞道也、彼れ自ら生命を有せり、人能く是の道に從て其一小微品の元始より己れに適合せる神活を受け、己れに賦せられし所の精神に體して永く貴神に事ふるを得ば、則ち不朽の人と成る、此れ再開更新の人にして永遠に達す、此の人や何をか爲す、此れ純良清善と勇邁耐忍たる靈心を以て罪惡を攻伐し總ての邪惡と大戰し、終に魔鬼に勝ち惡世に勝ち惟だ善惟だ誠の事業に由て以て永く上天の父母に奉行するもの也。

抑も聖言成つて肉體と爲り、聖言成て社會と爲り、此れ又成て勞働と爲る、我が希望の基礎たり、我が現在の眞實たり、或は此を救世君と曰ひ、或は此を改造物主と曰ふ、即ち父即

ち君即ち母即ち主、此れ我が家の主君たり、永遠の生命は此に由る也、之を感じて之を知り、之を望んで其體に進み、此に生活して之に生長し、我が懼れは彼の喜びの中に消し、我が憂は彼の愛中に化し、自身は萬衆の中に失ふなくして、而して開新せる己れは萬衆に由て以て其の社會に於て完全を成す、此れ永遠の生命なり。

聖言成て社會と爲り、而して我れ其社會に於て聖言に達するを得、然るに其社會は聖言の社會也、呿喇嚌、教師の社會に非ず、學士、官吏の社會に非ず、泥棒商人の社會に非ず、是れ貴神の社會たり、聖言之に充つ、聖言は貴神の言にして眞人の一體たり、眞實の太陽たり、而して彼れの體は又我が樂園たり、新地たり、我は彼に從つて遊び、悦んで事ふ、彼れの召す所は我の應ずる所、世の所謂苦樂安難亦何ぞ我に有らんや、人能く眞實の地に達せば命に從て或は北海に居り而して越て又南洋をも抱かむ、此亦一種也、洋界の童子に似たる耶。

嗚呼我れは此れ何ぞや、夫れ我は人たるか、何を以て能く然る、貴神立つて我が中に在ませば也、所謂立つとは坐して眠らるるものに非ざる也、夫れ貴神は人たり、眞人たり、我れ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

若し彼れの社會に入るに非ずんば何を以てか人たるの資格を得んや、我れ若し彼れの人體に進んで其神愛に生けるに非ずんば必ず以て人と爲るを得べからず、然と雖も、神は人の主たり、人中に寓せり、之に寓せられざるはなし、彼れは我が本源たり、我か由路たり、我か意志言行の由て成る所也、唯人多くは非聖を以て自ら闇黑に沈淪す、其沈淪も亦漸あり其知其性其心其殼、一々漸々剝喪して終に空虛に失に至る故に好美なる萠芽ありしと雖も凍寒なる我慾の爲に死絶せりと謂ふ。單に現想のみなる物は皆な滅絶に終る、其種子も亦死す、後胤皆な滅絶を免れす、塵埃の表外に超然たらざるものは（俗情に因れば氣の毒の如くなるも）塵埃に歸せざるはなし、死滅無生は此等が止まる所たり、其最終の停處は滅亡也、其滅亡するに先たち、其心境黑色の淡濃に從て其憂悶程度を異にす、凡そ此の浮世塵埃の徒は其殼骸に中毒負傷無んばあらず其の重き者早く斃る、其物自ら斃るゝを知るに至ると雖も奄然として其立つ所以を求めず、而して此の骸骨亦其死滅を欲せずして之を惡む、醫を求め藥を服す、而して醫之が爲に能く爲す無く、藥其功を奏せず、蓋し源なき者は涸れ、生に屬せざるものは滅する、此れ定命也、故に此等の死するは當然たり、當然にして而して其之を哀しむに至るは誠に笑ふべきなり。

浮世塵埃なる動物に、有毒と雖も有罪ならざる者あり、又重毒にして多罪なる者有り、此れ邪神の其中に存して之を所有すれば也、此物或は早死或は晩死せん、其の滅亡に及ぶは一也、其物既に亡て其種子又終に滅す、而して多年經過の久しき此地全く消毒せらるゝに及ば、塵埃も亦淸かるべし、是に於て我が父母兄弟高く其上に立ち靜焉として其の樂園に遊ふと謂ふ。

或は云ふ、此の汚穢に充ち悲慘に溢るゝ世の牖戶より地下黑暗なる古戰塲に臨觀せば、昔の有權有力者に似たる者續々有り、彼に新知なく發達なく、又從て苦痛なく慾物もなく一に唯だ寂寥不快の黑點たりと、嗚呼此れ詩人文士の夢見にして其の物自分に取ては然るに非るものなり、其不善の行爲其不誠の心機、凡そ生前の悲情は猶ほ慘として陰府の深底に在り、陽光未だ之に及んで之を鎔化せざるものありと謂ふ、若し權力ありて道に由らずんば、一小微分の感念にして尙ほ存するの間、死後と雖も其苦痛煩悶絶えざるありと謂ふ。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

昔し黄金の界有り、白銀の世あり、降りて銅と爲り鐵と爲り而して今や頑然石と爲る、若し以て玉を磨くべくんば亦用ゆべし、唯だ現世のみ然りとするに非ず、死者の死界と雖も亦然り、但し幽靈なるかな、暗黑なるかな、嗚呼。

此地の君王、此地の法師、此地の大族、此地の貴女、如此者皆な死して他界に至る、皆な他界に至る而して其嚴法欺くべからず、苟も死者の感念にして殘るあるか、其の記臆にして留まるか、白狀言を待たずして顯明に徹了し既往の萬事自覺自感に堪ゆる能はざるもの有りと謂ふ。

彼等は精神的に非ず、幽靈的たり、其感は生命の默示に非ず夢幻の妖氣たり、彼等が知とする所は何ぞや、或は汚池毒流の泡沫に過ぎざる也、其心は如何ん、或は魔境凍餓の嫉惡に止まる、嗚呼下地に屬する愚者か、其自己の慾想、其家庭の情態、皆な朦朧として夢の如く、精神よりは既に死して而して猶且つ己れ其の私有を神に屬するの地上に私念す、彼れの幸福は既に飛び去り、世運は固より彼れの時と背く而して彼れ自ら之を知らじ復た又樂世に反りて其餓鬼道を舊の如くに逞ふせんと夢念す、笑ふべきの甚だし。

舊時又舊事、我れ必ずしも罪事と謂はず、必ずしも惡疾と謂はず、凡そ事の舊に屬する者は死物たり、死吏に在て開轉新發の生命に働かざる者、之を思ふは、死に面する者也、之を究むるは、生に背するもの也、蕭々として苦樂皆な煙の如く而して毒之に繞ふ、嗚呼、昔しよりして頑風は世の心眼を戕賊し、世人は唯だ其慾界の慣習に苦悶に奔走して曾て無我快樂の生活に遊ぶを欲せざる也、故に薄弱より薄弱に流れ紊亂より紊亂に長ず、亦勢の當然也、若し夫の祈禱念佛百禮千式世人の用る如きは、只だ死滅に事へて之を歡迎するの道具なりと謂ふ。

凡そ死滅を好む者は死滅に至る、極寒極黑一點の生氣なきに至て其死たるを知らず、其死たるを知らずと雖も時未だ至らざれば其煩悶絶えず、死を思ふて而して奮然として起つて生に事ふるの道を盡さざるものは皆な死滅に滅亡す、此れ定命也、死滅來らば將た何を以てか之を迎かへん、先づ非宗の教師を遣りて之に與へん、我がクライストは死滅の友には非ざる也。

夫れ道は快樂也、故に心身快樂ならざれば以て道に從ふ能は

ず、道は社會也、社會を以て其外體と為す、故に事業、社會に達せざれば以て立つ能はず、而して社界は慾界に非る也、故に善く精神を聚めて而して慾界に勝つに非ざれば以て眞の社會を見る能はず、世人は其別を知らず、故に慾界を誤認して以て社會と為す、此れ非社會也、人慾の別名に過ぎず、雖然も世人の如此謬誤たるに拘はらず、美善の社會の循々然として慾界の上に立ち、其中心を貫て下に擔ひ其前に在ては隱然として之を導き而して其後に於て之を推轉上送するものあり、此れ即ち我が太陽と地球との間現今特典の靈働にして此れ眞神の聖意に原由する所のものなり。

今人の憂は其の所謂迷信を去ると同時に其の固有の信を失ふに至るに在り、其の諸學を研究すると同時に其の非神に入て無眞と為るに在り、史家は常に其の當さに忘るべからざる一大眞人を忘る、是を以て歷史も亦死物と為る、夫れ唯だ誠の精神を有する者にして而る後ち學其れ為すべく、而して史も亦た讀むべき也。

To know is knowledge; and to know one thing: *how to serve God.*

"In the beginning, and now, and for ever, *man is male and female. In his divided male selfhood, he is incomplete and is not yet man.*"

"*The reign of Divine Humanhood is dawning and will crown humanity, and harmonize in one grand unity all things in Heaven and earth.*"

"*Her Kingdom is descending and will make all things new.*"

"*She is the nearer 'Likeness' of God, and he the remoter image: the two are one man.*"

"*There could be no degenerate race, until marriage fell away from God into the lust of the flesh; nor can there be a Divine race on the earth, till marriage is utterly in God and unto God.*"

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

雑録

女子に關する古代人の思想

赤司嚼花

女子問題は二十世紀の謎語なり、この問題の解決は確かに社會の狀態に一大變動を生ずべき素因を秘す、今日歐米と云はず、日本と云はず、思想家のうちにこの問題の研究稍々盛んならんとするは實に喜ぶべきの現象なり。女子を研究するに當つて其方面や多岐に渡れるものあり、歴史の方面より、社會學の方面より人類學、生理學、心理學、其他の種々なる諸方面よりして精細緻密なる研究を要すること言を待たず、されど、こゝに一の緊要なる點あり、現時女子の位置、東西其趣を異にして國邦によつて差別あり、而かも其差別の基ひする所、多くは其國民が有せし女子に對する思想に大關係を有するものあるが如し、歴史上國民の思想にも大なる變遷ありしことは明らかなる事實と認めざるべからず、殊に宗教的道徳的の感化によりて幾多の沿革ありしなるべし、而かもわれは古代人の思想が此等轉變代謝の奥底に一貫して、其移り行く時々の思想と其交叉して顯はれ來りしことの多きものあるやを疑ふものなり、女子問題に關して殊に古代人の思想を研究するの要こゝに於てか益々多きを覺ゆ。

神話は古代人の思想を窺ふに最もよき材料たり、各國民皆殆んど獨特の神話を有す、いでこゝに三四の神話より女子に關する思想を觀察せん。

天地を分ち陸に海に空に生物をつくりて後、神なほもたふとき動物あらばやと思し、諸神の像に肖せて人は端然の姿につくられぬ、故に、總ての動物は伏して地をのぞみ、人はふり仰ぎて御空の星辰をながむ、

チタンなるプロメトイスと其兄弟エピメトイスとは人と他の動物とを作りて、必要なる能力を與ふるの任務を託せられぬプロメトイスは事務を檢査し、エピメトイスはこれを作りて勇氣、勢力、敏捷、鋭利等、種々の賜物をそれ〴〵の動物に賦與し、又或物には羽翼を、或物には爪牙を、他の或物には殼を與へたりき、エピメトイスは總ての賜物を皆かく與へ盡したるを以て既に人に授くべきものを有せず、故に、せん術を其兄弟に計る、こゝに於てかプロメトイスはミチルワ神の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

力を借り、天に上りて日輪の兵車にて彼の炬をもやし、火を人類にとり來りぬ、されば人はあらゆる動物に勝りて、火もて野獸を征服する武器を造るに適し、火もて地を耕す器什をつくりぬ、また火は彼が住居を暖め、寒氣に打勝つことを得しめぬ。

この時婦人未だ作られざりき、或はいふ、ヱピテル大神、婦人をつくりてプロメトイス及びその兄弟におくり、彼等が天火を竊みたる罪にむくひ、人にはその賜物を受けたる咎を罰せんとす、原始の婦人、名をパンドラと呼び、天に在りて造られぬ、神たち各々彼女を完全にせむとて、皆これに何物かを寄せたまふ、ヴヱヌスは美を、メルキユリーは辯巧を、アポロは音樂を與へたり、パンドラかくよそほしく裝はれて、下界にくだり、ヱピメトイスに遣らる、ヱピメトイスの兄弟プロメトイスはユピテルとぞが賜物とは戒しめて懼るべしとて彼に注意しけれども、彼は斥けて之を用ゐず、パンドラを受け得ていみじう彼女に愛着しぬ、ヱピメトイスかねて禍をもりたる瓶をその家に藏せしが、パンドラ是を覗はんと欲する心篤し、ある日ヱピメトイスの在らざるに乘じ、その蓋を去りて瓶中を瞰る、これより人類幸らなう、災害みち〳〵肉躰の上には痛風、リユーマチズム、疝氣等の病を生じ、精神には怨恨、憎惡、敵對等もろもろの惡德はじまり、災害の氾濫益々甚しうしてつひに底止する所を知らず、パンドラはこの樣をみて愕く事大方ならず、蓋を覆へども既に及ばず、剩す所は只瓶子の深底に潛める只一つの希望てふものあるのみ、されば今現し世の今日に至るまで惡の勢いかに強くとも、希望は常に吾人を去らず、いかなる害惡も、これあるによりて、全く吾人をして悲歎の淵に沈ましむることなし。

或はいふ、パンドラは人類を幸にせむが爲めにヱピテル神におくられたり、この時彼女は結婚の贈物を容れたる一の箱を與へられぬ、この贈物は諸々の神たち、それ〳〵に幸福を入れたまひしものなりき、さるをパンドラはおのが不注意よりして箱を開きければ、總ての幸福盡く免れ出てゝ、殘れるは只希望のみなりきと云ふ。

この神話は希臘羅馬に傳へられたるものなり、彼等が婦人に對するの思想は餘程高尚なるものあるが如し、之に反し婦人をみること低く、全く罪惡の伴侶となし缺點多き、意志薄弱

なりとせるは印度人及び猶太人なり、先づ印度人の神話より誌さん

時の初めにトワシュトリ神は世界と男子とをつくれり、この事果てし後彼神は女子を造らんと思ひめぐらしぬ、彼初め男子を造りし日、總ての材料を用ひ盡して既に固形躰あらざりし程なれば沈思默考に入ること暫時にして突如絶妙なる思想浮び、こゝに女子を造りぬ、其性質は月の圓さと蛇のうねり樹枝の撓みと草の戰きと、芦の纎弱と花の觸りと、葉の輕さと牡鹿のにらみと、かげろふと雲の涙と、風の浮氣と兎の臆病、孔雀の虛誇と雀の胸毛の柔軟、金剛石の硬さと蜜の甘さ虎の殘酷と火の煖さ、雪の冷さと樫鳥の饒舌と鳩の鳴聲等を合して女子を造れりき、而して彼女を男子に與へき、然るに八日を經、男子トワシュトリ神の許に來りて曰く「神よ、われに與へたまひし賜物、却つて我の存在を害す、彼女は間斷なく喃々としてわが時間を奪ふ、これとて取いてゝ惡き所あるにあらねども彼女は常に不快なり、われ彼女と共に生活すること難ければわれ彼女を大神に返へしたてまつらむ」と、こゝに於てか神彼女を取返へしたまひぬ、又八日を經て彼の

男子神の許に來り告げて申さく「神よわが生活は彼女を返へしまつりし以來いと寂しきの極を感ず、われは彼女がわが前に在りて踊り歌ひしことあるを覺ゆ、又彼女は眼の隅にてわれをにらみ、われを樂しましめ、われを賞讃せしことありしを記憶す、神よ彼女を再びわれに返へしたまへ」と、トワシュトリ神、これをきゝ彼男子を憫みて女子を返へしぬ。其後三日を經てこの男子再び神の前に來り欝然として首を垂れて曰く「神よ、われは理由を知らざれど、彼女はわれに愉快を與ふるよりも苦痛を與ふること多し、いざ再び彼女を取返へしたまへ」と懇ろに祈れり、されど神は憤怒して叫びたまへり「行け男よ、汝が隨意になせよ」と。男子「われ彼女と共に住むこと能はじ」神「いかでこの女子なくして御身生活をなし能はんや」と。斯くて男子は長嘆息して曰く「さても憫れむべきものなるかな、われ彼女と共に住むこと能はじ、又彼女なくして住むこと能はじとよ」と泣き叫べりとなん。

舊約聖書に記せる婦人創造に關する神活以下說く所の如し、舊約聖書には創世に關する記事二あり、創世紀第一章より第二章二節の半に至るこれ其一、仝上創世記第二章前半（後半

は前の記事に屬すべきもの日本譯この點に誤謬ありき）より第三章の終に至るこれ他の一なり、神の思想、記事の內容、文勢等より察し來れば、後者前者よりも一層古代のものなること決して解し難きことに非ず、前者のには「神其像の如くに人を創造たまへり即ち神の像の如くに之を創造、之を男と女に創造たまへり」と有りて女性に關して云ふ所なし、されど後者は婦女觀を明示せるものあり。

エホバ神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に嘘入たまへり人即ち生靈となりぬ、而してエデンの東方に園を設けて其造りし人を彼地に置たまへり、エホバ神は又エデンの樂園に觀に美麗く食ふに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善惡を知るの樹を生ぜしめたまへり、エホバ神其人を挈て彼をエデンの園におき之を理め之を守らしめたまへり、神は彼に善惡を知の樹の果實を除く外總ての樹實を味ふも自由なることを告げたまひき、エホバ神は其後鳥獸等を造りて野と天空とにすましめたり、されどアダムを助くるものなかりければ、彼を熟睡せしめ、其肋骨の一を取り肉をもて其處を塡塞たまへり、エホバ神アダムより取たる肋骨を以

て女を成りてアダムに與へたまへり。エホバ神の造りたまひし野の生物の中に蛇最も狡猾し、蛇婦を誘ひ、園中の善惡の樹の實を食はゞ目開けて神の如くなりて善惡を知るに至るを恐れて之を禁じたまふものなることを以てせり、婦樹を見れば食ふに善く目に美麗しく且つ智慧からんが爲めに慕はしき樹なるによりて遂に其果實を取りて食ひ亦之を己が偕なる夫に與へければ彼食へり、エホバ神之を知りて怒り、婦に云ひたまひけるは我大ひに汝の懷妊の劬勞を增すべし汝は苦みて子を產ん又汝は夫をしたひ彼は汝を治めん。エホバ神は又彼等が善惡を知るに至りたれば手を舒べて生命の樹の果實をも取りて食ひ無限生んことを恐れてエデンの樂園より追放せりき、斯神エデンの園の東に天使ケルビムと自ら旋轉る焔の劍を置きて生命の樹の途を保守らしめたまふと云ふ。

この傳說を讀むもの誰かカルデヤの生命の樹に關する傳說を連想せざるものあらんや、カルデヤ古代の圓柱に、二人の男女生命の樹に手をさしのばして其果實を取らんとす、其左に在る女子の背後より頭上まで長くのびあがり恰かも罪惡を囁嚅せんずる如き蛇の圖あり、これによつて察するも倘ほカ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ルデャの古傳說は猶太の神話と同じく女子に關する思想甚だ低し。

北歐神話の下に顯はれたる女子に關する考察は猶太及び印度人中に在るものより稍々高尚なるものあり、諸神は巨人イミルを殺し、其體軀より地を造り、其血潮より海を造り、其骨より山を造り、其毛髮より樹木を造り、其頭蓋骨より天を造り、その頭腦より雲を造り、そをして霰と雪とを運ばしめ、その眉毛よりミッドガルド即ち中地を造り、そを以て人類の住處となしぬ。

かくて後オディンは天に日月を懸け、晝夜を分ち四時を定め彼等をして各々任を盡さしめぬ、日は光を放ちて地を照し、草木をして發芽、成長せしむ。

諸神世界を創造せし後、海邊を逍遙して、なほ事業に缺くる所あるを見出でぬ、何ぞや、曰く人類の棲息せざることこれなり。

されば諸神は秦皮樹をとりて男を造り、赤楊をとりて女を造りぬ、男の名はアスク、女の名はエムブラ。オディンは彼等に生命と精神とを賦しぬ、フイリ（ヘエテル）は理性と運動力とを賦しぬ、フエ（ローデル）は血と五官と感情表出の方法を言語と艶麗なる容色とを與へぬ、ミッドガルドは彼等が住居の場所となりぬ、かくて彼等は人類の始祖となりぬ。

人類の間に罪惡の汎濫することはエムブラが罪を犯せしに始まれるに非ず、ロキなる禍神の仕業に負ふ所甚だ多きものあり。

日本神代の女性に關しては嘗つて外山文學博士と井上哲次郎博士との間に論戰の花を咲かせたり、外山氏の女尊男卑說未だ全く信を措くに足らずと雖も、日本の神話中其高位を占むる天照太神が女性なることは獨逸人の太陽を女性として Die Sonne と呼ぶと同じく女子を尊崇したる古代の現象を察知するに難からざるべきを信ず。

斯く記し來りて其古代の人民の後裔なる諸國民の間に於ける女子の位置を觀察し來れば自ら其中一貫せる眞理の伏在せるものあるを想見すべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

舍監の四ヶ月（其三）

有美

○世の中には色々なストライキがあッて子……職工のストライキ……車夫のストライキ……女中のストライキ……さては、『東雲のストライキ、さりとはツライねッてなこと、おッしやいました子』といふ譯になり、學生のストライキなどもあるものですが、中學校長以下教員十名のストライキといふのは……僕の出遇ッたのが……マアー空前でせう。この騷ぎが、まだ〳〵落附かず、新に任命になッた校長が廿日と經過ぬうち教科書事件でアゲられる……實に學校中が火事場の樣な大混雜でした。

○もとより騷ぎ好き盛りの書生たちのことですから、到底溫順くしてるものでは無い。騷ぐワ騷ぐワ大騷ぎ……或る新來の先生とこなぞは、弱いと見くびッて侮るし、廊下はドシドシと驅け廻はるといふ具合で、實に亂暴至極なのです。しかし、僕は是れ位のことは、血氣の青年には當前のことゝ思ふて、別に氣にも留めませんでしたが……サアー……世間の噂が大變やかましいので……。

○中學の生徒は、此頃市中に出て酒を飲む……ヤレ……ピストルを持ち廻ッて市中の若者に喧嘩を賣る……さては青樓に上るものが續々ある……それがしの夜には、寄宿生數名隊を組んで、深夜に醉歩蹣跚放歌高吟して、なにがしの街を通ッた……今や中學は無秩序の極だといふ非難が、實に盛になッて來ましたのです。

○こうなると、默ッて居られなくなッたのが、臨時に校長事務取扱をしてをる先生で……愈〻この先生の發案により或る日の午後、生徒一同を講堂に集め、課業を廢して訓戒を加へるといふことになりましたサ。さて、その亂暴を爲たり秩序を亂ッたり、風紀を害したりすると目されてる生徒は、重に寄宿生なので、畢竟舍監長代理たる僕が、監督取締の不行屆で、餘り放任主義だから、こんな亂脈になッたのだとは……ソウと口に出しては言はぬものゝ……教師先生たち一同の腹の底に蓄へた考らしい。

○なる程……僕は隨分放任りぱなしに爲て置いたので子……

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

……他人に害を懸けぬ範圍に於てなら、何んなことでも勝手にしろ……消燈喇叭が鳴ッてから、起きて居ること……これ……よろしい。然し、煌つく光は、既に眠に就いてる室員の脳を害すること甚しきもの故、必ず黒い布を以てラムプを包むことを忘るゝナ……火の用心は僕がしてやる。……笛を吹いたり其他の樂器を弄ぶこと……それもよろしい。然し、これは隨分他人の勉強の邪魔になるものだによッて、正午より一時まで、……五時より六時までの間に於てのみしろ。……これまでは、樂器を弄するものあれば、悉く之を沒收して嚴しく叱ッてたものなのです……。菓子を室内で食ふこと……これも苦く無い。煙草を吸ふてるの……これも格別イガミつけぬ……。門限に遲くれても……ナーニかまはぬ。一切舍生に荒い聲をかけぬといふのが僕の方針でして子……世間で寄宿舍の風紀が亂れたと思ふのも、勿論でサア……。ハハ……ハ……僕は故意に亂だしたのですから。

○こうして置いて、暫く摸樣をながめ、……到底佛性なく濟度の見込みのつかぬものは、ドシ〱片ッぱしから退舍を命じて、其寄宿を謝絶しやうといふのが、僕の眞意でした。こう申すと……寄宿舍で惡るかッたものは、これを舍外に外宿さしたら、益々惡るくなッて遂には墮落するだらう……實に不親切な考では無いかと仰せになる方々もあるでせうが……それで墮落する樣な人間は、今中學時代に墮落せずとも、いつか一度は必ず墮落するもの、……充分金を使ッた後の高等學校や大學時代で墮落し、父兄に失望と損失とを懸けるよりは、寧ろ……マダ金もソウ〱かけぬ中學時代で墮落して置く方が、却て早くキマリがついて、當人の爲めにも父兄のためにも……又國家經濟の爲めにも……實は利益であると……こう腹のうちでは思ふてまして子……
……。

○生徒一同といふても、寄宿舍生が大部分を占めてることだから、僕にも……前申した大訓戒を行ふ際、是非一場の訓辭を垂れてくれ給へと、例の臨時校長事務代理の先生から申渡されましたが……丁度それが、當日より三日ほど前でしたサ。よろしい！と引受けた。……引受けて子……この日はウンと一つ生徒一同を泣かしてやらう、……ウンと泣

かせなくては、何年と無く謬まッた教育主義のもとに支配されて曲ッて來た魂は、兎ても眞直ぐになるものでない。ウンと泣かせてやれと……こう決心しました。

○さて、愈々泣かせるといふ段になると、……サア仲々の大事業なもので……マサカ、唐辛子の粉末を多分に懐中して出かけて、講壇の上から振り撒き、それで我れも泣けば他人も泣くといふ簡單な譯に行くもので無い……實に行くもので無いのです。まづ、第一に己れを誠にして、自ら責め自ら泣くといふのが大切なので……自ら泣かずに、到底他人を泣かせることは出來るものでは無いのです……。

○それですから、その當日までの三日間といふものは、實に僕は齋戒沐浴といふ意氣込みで、眠ても醒めても其日の事が氣にかゝり、深く自ら省みて己れの足らざるところを責め、……責ては、心私に神樣に、默禱し、……默禱しては涙ぐみ……涙ぐみては自ら省み自ら責め……責めては又默禱し……神、願くは我が心を憐み、我が貧しき言によりて、彼等生徒の心を動かし、其心機に一轉を與ふるを得せしめ給へ……と、絕えず祈ッてたのです。僕は準備しましたよ……その日の訓辭の爲めに充分準備し、三日間充分仕度をしましたよ。……仕度を爲て……そうして、出て參りましたサ。

○愈々……始まッて……校長事務取扱の先生が、滑稽まじりに一場の訓戒を與へた後が、即ち僕の番で……僕は……まづ……講壇の上に登りて、前にゾロリと居並ぶ生徒一同を一目視おろしたら……もうハヤ堪まらん……別に唐辛子を早技で瞼の間に擂り込んだわけでもありませんが……かねて望みの如く、眼は一杯に涙になッて來た……一語を發すると、モウ振るひ聲になッてるのですよ。アー…占めたと思ひましたテ。神樣が僕の祈りに耳傾けてくれられたのだと思ひましたよ、……全く……。コウ思ふて感謝の情を胸にたゝえながら、語り出しました。

○『僕が若し非凡の大人物であるならば、僕が一言を發せず一の訓戒を與へずしても、諸君は唯僕あるのみにして、其感化により、其人品を向上さすることの出來る筈だ。然るに、近頃、諸君の行動が間々穩かならず、人間に之れ有るまじき所行や、學生に之れあるまじき行爲、また共同生活を營む

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

者に之れあるまじき擧動あるは、畢竟……僕の不德にして人物の偉ならざるより起ることだ。

○『諸君もし家庭にあれば、各々皆な嚴父令兄の取締行屆けるあり、慈母令姉の恩愛豐かなるものある故、その品性と行動とを愼み修むるを得べけれども、今、諸君を其家庭より預り受けて養育敎薫の重責に當りつゝある僕は、實に不德にして諸君の各々が有する父兄の如き注意の周到なる親切なく、又諸君の各々が有する母姉の如き懇切と愛情とが無い……また二百人といふ大家族であれば、兎ても諸君の各々に充分取締と保護が行屆かない………、それで、諸君は今日の如き亂脈な次第となッたので、必ずしも諸君の惡るいのでは無い……僕が行屆なく至らない爲めの致すところである。』

○モウ……流石の亂暴ざかりの生徒でも、顔をあげて僕を正視してるものは、一人も無い……皆な涙ぐんで鼻水を啜つてるのですよ。實に可愛いではありませんか。西郷サンが城山で生命を捨てる樣になッたのも無理ではないと……その時思ひましたよ。全くです……。生徒ばかりではありません……敎師も三四人は啜り聲をたてゝ、眼に涙で貰らひ泣きをして居られましたサ。それで

○僕は話をすゝめて『……しかし諸君……それでは、この二百人といふ大團躰が、兎ても持ち堪へられて行くものでなく……又諸君自から品性を墮落さすることなのだから……諸君もし自らを愛する心あらば、自ら亂脈なる行動を避けられたし。もし、今後ともなほ人間に有之まじく、學生に有之まじく又共同生活を營むものに有之まじき所行の人あらば、遺憾ながら斷じて退舍を乞ふに至るべし。この種の行動あるもの、約廿人を退けなば、この中學の寄宿舍は立派なものとなるべく、予は其廿人の姓名も悉く之を知る』と結びましたサ。その『人間に有之まじき擧動』とは、暗に男色を戒めたものです。

まだあります

劒を以て劒、血を以て血、嗚呼。喝。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

宇宙と人生及靈魂に就て（其四）

黑岩周六君演說

此理を推して更に宇宙の大を考へて見ますと、宇宙と云ふ大極も吾々から見れば唯物を動かすと云ふに止まるのでありますけれども、其動くのが即ち心であるとすれば、宇宙の大なる大極の中に一つ何等かの心があると云ふことは想像の及ぶ所であると思ふ、なぜなれば動くのは即ち心である、宇宙なるものは一つであるか二つであるか數限りなく變化して居るけれども、其實大なる一つの體であつて萬物が總て小極の微に至る迄も大極から動かされて居る、故に何等の心もないと云ふことは信ずることは出來ない、外から見ると宇宙は動くだけである、單にモーションである、併しモーションは心であると致して見れば宇宙と云ふ者の動くのも矢張り心であると斷定するより外に仕方がない、是が此宇宙の力をば學術的に申しますと云ふと、是は宇宙の內觀、宇宙のエゴー、宇宙の自心である、吾々から申しますと云ふと吾々の動くと云ふのは吾々の心即ち吾々のエコーである、宇宙の動くのは宇宙のエコー、自分である、今の哲學者などの議論のパンエコーエズムと云ふ字が出て居りますが、パンと云ふのは万物、何でも廣いと云ふ意味でエコーと云ふのは自分と云ふこと、パンエコーエズム、人間は自ら見ると人間の動くのは人間の心であつて、宇宙が自ら見れば宇宙の動くのは心である、それは丁度吾々の躰は單細胞動物と云ふ數限りもない小さな動物から成立つて居りますけれども、其小さな動物には銘々何等かの心があつて、胃の中に食べる物が入れば直ちに淋巴腺から淋巴が出て來てそれを食べて居る、小さいやつにも銘々心があつて動いて居るが、其小さい物から出來上つた總躰の吾々と云ふ此躰に一の心がある、宇宙の大極に比すべき吾々の心ではないか、吾々の躰の中に一つの心があればそれは小極としての心で、更に其上の大極にも其樣な心があるに違ひない、詰り人間の躰に成つて居る小さい蟲には小さい蟲だけの心があつて、其蟲たるや其蟲を支配して居る人間總躰なるものゝ中には其蟲の知らない心がある、それが吾々に分つて居るのですからして、又吾々が成つて居る大なる宇宙には吾々の知らない心があると云ふことは是は想像することが出來る、吾々自ら言へば心であつて吾々の外に動くものは動くモーションである、エネルギーである、エネルギーであると云ふことは自ら見る時にはそれは心である、何でも心は自分から見た時のみが心で外から見れば動くと見えるに止まる、動くと云ふことは自分から見れば何でも心で、宇宙の大と雖も宇宙自らのものは何等かの心でなければならぬ、此點から論じて行きますと宇宙と云ふものは大なる靈物であつて、大なる動き方であつて、動くと共に大なる心である、其心は吾々が見ることは出來ないけれども何等かの心がそこにあるには違ひございませぬ、それは吾々自らの躰に依て想像される、如何なるものでも必ず大極小極の二つになつて居るので、小さい單細胞と云ふのと大きい吾々の躰と云ふのと違ふだけで、單細胞と云ふ小極にも心があり吾々の躰と云ふ大極にも心がある、吾々の躰と云ふ小極にも心があるから宇宙と云ふ大極にも心がある、單に之を心と申しますと餘程誤解を招きますけれども、嚴しく言ひますれば是は主觀或は自觀である、人間に自ら觀ると云ふことがあるが如く、宇宙にも自觀がある、是だけの事はどうしても當り前の議論に依て變更することは出來ない、先づ是は諸君の同意を得た眞理として置きまして次は吾々の靈魂に移らうと思ふ。

此靈魂と云ふものがどのやうに存するか、靈魂不滅と云ふことは靈魂が消えないと云ふことでありますから、消えずに引續いてあると云ふ斯う云ふ意味でございます、此靈魂の不滅と云ふのはどう云ふものであるかと云ふと、先づ死んだ後の吾々の靈魂の議論でありますから先づ死ない中の今の靈魂を考へて見なければならぬ、今の靈魂なるものはどのやうにして引繼いて來るか、先刻申上げました通り肉躰と云ふものは七年に替つて仕舞ふ、けれども兎に角吾々自らと云ふ自覺は七年經たらが八年經たうが變るものではない、三十年前の我も我であり、五年前の我も我である、我と云ふものは先づ昨日の我と今日の我とは自分の我と云ふ感に於ては一つである、是はどう云ふことかと言ひますと、昨日の我が今日の我に記憶せられると云ふことである、昨日の我は昨日既に過去つて仕舞つて今は何にも無いのである、今の我は今方に過去らんとしつゝある、今の我が昨日の我を捕へることも出來ないやうなものでありますけれども、併し昨日の我は今の我に於

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て不滅である、今の我が記憶して悉く引續いて繼續されて居る、それは其の繼續しますのは別に改まつて繼續するのぢやない、唯昨日の我と云ふものが次の我へ次の我へと傳はつて行く、何で傳はつて行くかと云ふと記憶として傳はつて行く自分と云ふ心の上で唯記憶として傳たはつて行くに止まる、それでありますから吾々が死んだ後とて若し吾々自身と云ふ自分の考が、どこかに記憶として存して行くならば、是て吾々は靈魂不滅であると言はなければならぬ、此吾々の靈魂と云ふものを若し今迄の人が考へそやうに、或は人魂の如きもの幽靈の如きものだと斯う考へますとどう云ふ說があるか知りませぬが、吾々の見る靈魂と云ふものは、宇宙に於ては宇宙と云ふ一の自觀があり、吾々に於ては自分と云ふ自觀がある、是が靈魂であるのであります、此の自觀たるやもう既に現在に於て消滅することなく、昨日の我は今の我に引續き、昨年の我は今年の我に傳はつて、少しも其間に切目のないものであるから、吾々の死んだ後とでも此通り何かにか引續き傳はるので、それで今靈魂の不滅と云ふのは今の吾々の感じが次の何物かに引續くと云ふより意味がない、それが靈魂の不滅であります。

吾々が死ぬると共に果して靈魂が消えて仕舞ふか、何かに引續かれるかと云ふのが問題であらう、それで宇宙を一つの物質として見まする時には人間の躰は物質の海を走る波である、死んだ所が人間の躰と云ふ物質は物質たるを免れない、人間の躰が物質の海に歸して物質の海の一部分となるのだ其物質の海たるや其中に自觀即ち內觀と云ふものがあるとすれば、人間の內觀なるものは物質界の內觀に歸するのではありませぬか、水中に吾々が死ぬとしますれば、此吾々より見れば一の大なる水に人間の躰は物質に歸するが、人間の躰に籠つて居る物質の內觀は物質界のエコーに歸するのではないか、英吉利のスペンサーがキママブ、エンド、コンメンドと云ふ本を著はしてあつたが、スペンサーは何と言つて居つたか、限りなきエテルナーに歸するのである、斯う云ふことを言つて居る、此一言が實に私は靈魂不滅の悟りを能く言現はしたものであると思ふ、人間は唯自分の躰が死ぬれば人間の靈魂とか命とか云ふやうなものを物質の作用であるかの如く考へまして、無神無靈魂論の如きものは、丁度人間靈魂は薪が燃えるやうなものであるから、薪が燃えて仕舞へば其火も滅ると斯う說て居りますけれども、薪が燃え切れば其薪は或物となつて物質界に存すると云ふことは無靈魂論者も既に認めて居ります、若し薪が存するとすれば薪を組織して居る內觀なる者は何故に消えて仕舞ふ、消ると云ふ證據が無いのでございます、人間の自分と云ふ感じは、人間が死んだならば其自觀が宇宙の自觀に歸する、是だけの斷定は下されるのでございますが、宇宙の自觀に歸すると云ふのはどう云ふことであるかと云ふと記憶の連續てある、昨日の我が、今の我に記憶さるゝ如く、現世に於ける我なるものゝ靈魂は宇宙の自觀に引續いて行く、其自觀は即ち大なる心である、宇宙の心が人間の世の中にどのやうに現はれて居るかと申しますと、是は又驚くべき程靈妙に現はれて居りますのです、全躰吾々なる者が何故に此世に現はれたか知らないのに此世に現はれて來る、何故に子孫が出來るのも知らないのに子孫が出來る。是等のものは皆宇宙の中に潜んで居る力であります、宇宙の靈魂と云つても宜からう、世の中に宇宙の靈魂が意氣揚々として居る、其力が自ら物質を支配して、さうして子孫をも造らしめ生存競爭をも爲さしめあると云ふやうな工合に大變微妙に現はれて居りますのです、宇宙の自觀と云ふものは、宇宙自らの心と云ふものは吾々の想像に絕した程明かでです、極めて微妙なさうして精密なる一つのコンシャスネスである、吾々から云へは宇宙が動くと云ふだけでありますが、宇宙の內側から見れば吾々の心の及ばない非常なる働きでありますから、人間の心に存する位の記憶は、人間の心に存する位の働きは宇宙の大なる一つのコンシャスネスの意味を存して居なければならぬ。

宇宙を活物の如く譬へて言ふのは迷信のやうに聞えますけれども決して迷信ではない、今日の最も進步したる議論でございまして、哲學者の獨逸のポルゼンの如き、ブントの如きも宇宙は活物である、宇宙か活きて動いて居ると云ふ主義で論を立てゝ居ります、又近世に於て獨逸て名高い生物の心理學者の巨魁たるヘッケルの如きは地球ですらも活きて居ると說てある、それはなぜ其様な議論が出るかと云ふと、モーション、イズ、マインドと云ふ定義が出てからさう說くより外仕方がない、宇宙の內觀と云ふものは一種の靈魂と見るより仕方がない、人間の靈魂が死ぬと宇宙の靈魂に歸する、宇宙の靈魂は大なる自覺であります、自覺と云ふ以上は記憶もある、今日の吾々は物質として宇宙に歸して仕舞ふが、吾々の靈

魂は記憶として宇宙に歸して仕舞ふ、是だけの事は私の信ずる所であるのみならず、今の進歩したる學者、進歩したる哲學者或は宗教家は勿論のこと、總て贊成する所でありますのに、今の世に於きましては、未だ此舊思想の唯物論などが存して居りまして、物質と云ふものは唯死んで居るのでございますから動かされるより動くものではない、物質が死れは其外に靈魂はないと云ふやうな議論が存して居りまして、世の中の人は大變死ぬのを怖がり、それが爲に靈藥を求めるなどゝ云ふことがありますが、人間が一生の働きをすると云ふことは活きて居ると云ふだけの事でありますけれども、此世の働きば悉く次の世の宇宙に歸したる時の宇宙の記憶に存する、吾々の一生は唯空しく世の中に活動なしつゝあるのではない、宇宙の大なる自覺の記憶に吾々の記憶を抛込んでやる、それを考へて見ると吾々は中々迂濶に無責任の事をなすることは出來ない、此世に於きまして犯した罪は若し是が靈魂を滅するものとすれば無くなつて仕舞ふが、宇宙の記憶に存するとすれば實にどうも吾々の心は千年も萬年も引續いてあるものと斯う思はなければならぬ。

死も角も吾々が何であらう、何に活きて是からどこに行くかと云ふことは空漠なる問題でありますけれども、此世に生れたのは故なく生れたものとは思はれない死するのも故なく死するものとは思はれない、吾々の生れるのは二人の親があり其親には又二人の親があり、其四人に又八人の親がある之を四十代迄の前の人間を考へて見ますと吾々を生むには一億萬からの人間が掛つて居ります、世間の人が鼠算と云つてやる樣に、子の子が出來、孫に孫が出來漸々殖へて行くやうに、吾々人間も後へ行くだけ餘計搦かつて、五十代前になりますと吾々の先祖は何億人ありますか數限りなきものになつて參ります、吾々は其樣な多くの血がまぢつて此世の中に出て來て、自らを知らないけれども過然に譯もなく出て來たものではなからう。

尙一方から考へて見ますと吾々になる單細胞動物が複細胞動物となり、さうして段々吾々になる迄には少くとも何千万年と云ふ年限は掛る、或學者の說に依りますと一億万年掛ると云つて居る、ヘツケルの學說にもモナラと云ふ極小さいのが人間になるのに一億年掛ると云ふ、一億年の間單細胞動物から長形動物脊椎動物と段々經て來て、一億年の後に始めて出て來たのであると云ふ、然らば何等の意味もなく出て來たのであると云ふやうなことは信ずることは出來ませぬ、此世に出てゝ無益に暮す位ならば吾々は決して一億年の長き間下等動物の生活を經て暗い處を通つて、一億年掛つて人間にはならない、唯無闇に食べて稼いで眠つて起きてさうして死ぬる、是だけの事であるならば吾々は何等の世の中に感謝する所も何もない、其樣なものは私はどうしても信ずることが出來ませぬけれども、宇宙の內觀と吾々の內觀が或點に於て意味が通じて居る、吾々の內觀は必ず宇宙に刻み付けられる、斯う云ふ信念が一方に於ては起つて來る、信念のみでない理論の上で物質は物質に歸する如く靈魂は靈魂に歸さなければならぬ、其歸した大靈魂は記憶あるとすれば、此記憶の上に吾々の自心が記憶されないと云ふことはどうも無いやうに思ふ、是は私の說ではありませぬ、ドント、ボルゼンなどの唱へる所であつて、私は彼等とアイジヤモニズムと稱する信仰を同じうするだけで、是だけが私の靈魂不滅論の要でございます。(拍手)(大尾)

定見深睡録

(四)●義●勇●兵●を●許●可●せ●よ● 古來、開戰論を主張するもの、文舌の士に多し。文舌の士盛んに開戰を主張し、耳目の徒熾んに之に應ず。如是して國民擧な激昂し、兵士則はち家を出づ。兵士、家を出づ。老親、涙あり、妻孥斷腸の悲しみなきに非ずと雖ども、而も一笑して劍を帶す。是れ果して誰れの爲めぞ。

凡そ、國の爲に身を致すは、丈夫の事なり。男兒唯だ一死、邦家の爲に献ずるは寧ろ祝すべしと雖ども、只だ肉食者の横議に激發するは痴にあらずや。新聞紙、マッチの火に燃え、枯草則はち延燒し、之よりして大いに火の手上る、兵士手を鼓して曰く、戰機熟すと。滑稽に非ずや。

然りと雖ども、人生常に戰かひあり、列國方今の態度、豈に時として一戰なきを容さんや。凡そ戰かひは其の戰かふべき時に戰かはざれば則はち不可なり。たゞ絶對に戰かひを不可とする如きは、吾人與みせず。

但だ夫れ、戰かはざる可らざるに戰かひ、戰かつて而して其の戰かはざる可らざる所に止めしめんとを欲せば、かの文舌の士の囂々をして、責任ある根抵より發動せしめんと、頗ぶる緊要也。

此に於てか、義勇兵設置の制度を推薦す。

彼等は、戰時に於て編制せられ、戰場に遊軍として出兵するとを許さるべし。而して、凡そ開戰論を主張するもの、若しくは其子弟は、勢ひ此の義勇兵に投入せざる可らざるの機勢を促がすべし。

斯の如くせば、三の實益あり。責任なき開戰論は叫ばれざるべし、一也。眞に戰意ある人士は、英氣を軍隊に寄附するとを得べし、兵氣大に振はん、二也。戰、熄むの後、軍人跋扈の弊を豫防すべし、三也。

寄書

學生時期の女子に諭ぐ

原田松巖

薔薇の香と葡萄の緑は爾曹を飾る所以にあらず戀愛の言語は爾曹の仇敵として字書の上より除かしめよ爾曹の頭べには光明の耀ける眞神の宿りて貞操良淑柔順の教示を爲し給へり

天使は正しく爾曹をして來るべき良妻たり賢母たる精神的生涯の羅針盤たる位地に涖めり

嗟乎淫猥なる妖魔は襲來して今や我日本なる女子の肉躰と心靈を蠶蝕し去らんとす爾曹が垂髪に「リボン」の風采は實に輕薄男子の伴侶となりて共に墮落の深淵に沈淪せんとせり蓋し爾曹が曇り無き鏡面に映ぜられたる生命は畢竟ずるに善良な

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る所夫を選擇するの一事に外ならざる可し而して之れが意慾の彼岸に到達せんには貞操良淑柔順の教訓を離るべからざるは勿論也。近時我儕英國の新書を繙き嘗て同國に於て女子が最大目的を問ふ莊重なる題下に自由の意思を表明したる一事を見るを得たり而して區々に岐れたる言論諸説は終に全く所夫を撰擇するを以て最大の目的たるに歸結せり蓋し良夫の存在を認むるに於ては容貌の醜美は固より措て問ふ所にあらずして則ち赤色服と黑色服を以て神靈の感化に原きたる女性の意思なりと判定するに臻れり抑も赤色服とは護國の名譽ある軍人にして黑色服とは道德の躬行者たる宗教家なり共に是れ肉躰と精神上の勇者として婦女子の熱心なる至情に歡迎せられたるを見るべし又夫の獨逸國を觀るも顏面に刀痕なき者は女子の愛情歡心を惹かざるの感を有せり我日本鎖國の往時に溯るも可憐なる一傾世にして尚ほ「露をだに厭ふ大和の女郎花降る亞米利加に袖は濡さじ」と國詩を賦して外人を失戀せしめたる例なきにあらず吁爾曹の修養は復た往時の今川女大學の單純幼稚なる學問にあらず詎ぞ自から進んで貞操良淑柔順の實踐躬行を以て任ぜざる以て諭ぐ

隨感

先哲は花の如し

或人來りて語る、我之より大いに傳道せんとするに一の殘り惜しきとあり、則はち先哲の意見を考がへて、アリストートル迄には至りしが、尚ほ其後に及ぼさず、密かに以て憾みとす、其後の研究を先にすべきか、果た傳道を先にすべき乎、之れ吾が惑ひなりと。嗚呼、これ吾黨の數次經驗する所ろにあらずや。左れど、先哲の意見を考ふるにつけて尚ほ不足ありと云ふは、研究の不足にあらずして、自信の不足なり、足らざるもの彼に在りと感ずるは、其實己にあり、傳道豈に研究を要せんや、左れど公務もし、靜閑ならば、花を栽たしと言ひけん鐵血翁の如く、花を眺むるの樂しみもて先哲の心事を觀ぜんと固より無上の賓樂なり。吾は其の餘閑の許されんとを祈る。

前山口縣知事法學士武田千代三郎君講

再版 農民讀本 新農家

定價四拾錢　郵稅四錢

著述者は長く地方長官たりし經驗と其專攻の學問とに依り現下の社會問題たる「農民生活」に就き、家人として、私人として公人として時代に相應す可き知見あり品格ある文明進取の新たなる『農民』と『其家庭』とはいかにして得らる可きかと共體的に構思し乃ち之を基礎として着實穩當に本問題の解釋を試みし也

發行所　東京神田區美土代町二丁目一番地　自由英學出版部

發賣所　東京堂

日本女子大學校教授　松浦政泰先生纂譯

女學叢書　歐米家庭德育佳話

青年　立志の佳話　成功の美談　參百條

菊版美製●定價金五十錢郵稅八錢

家庭教育の好讀物●小中女學校の修身の良教材

發兌　東京京橋區尾張町三丁目　警醒社書店

赤司繁太郎君著

◎好◎評◎第◎三◎版◎

理想の宗教歌

定價拾錢　郵劵代用一割增

本書に二十世紀の大問題科學と宗教との調和、人間最高の理想と一致すべき宗教の何たるやを說明せるもの、出版後何日ならずして第三版を重ねしを以ても其價値を知るべし、幸に世の人生問題宗教問題に志を寄する人々の一讀を希ふ。

發行所　名古屋東片端町二番地　世光社

十月一日發兌

海老名彈正主筆

新人第四卷第拾號目次

●社說

◉私立大學論

◉青年會員に警告す

●論說

◉信のこゝろを思ふ　綱島榮一郎

◉日本基督教の前途　村田勤

●教壇

◉健全なる人生觀(其二)　海老名彈正

◉德性發展の順序

◉聖書講義第一幕ガリラヤ傳道　宮川經輝

●文苑

◉行く雲の記(其二)　わか葉子

◉旅路　汀鶯のかげ

◉我が家の初秋　夢の生

●雜錄

◉劇界の巨人圜洲逝けり　島田三郎

◉米國傳道局と日本傳道(某牧師の慷慨談)

◉フイヒテとヨハンナ、マリア(三)

●時評

文部廢止問題の教訓○青年男女の交際

●時潮小觀

女學雜誌の時勢觀○國民教育の方針○新理想主義の勃興○キリストの復活に關する一說○新聞學大學新ロマ法王パイヤス十世○ロンドンに於ける日本美術家○關好眠君の質問に答ふ○新刊書紹介○日本力行會情況○土佐短信○甲府に於ける明道會演說會○本郷會堂記事○片々○編輯錄事○正誤○明道會廣告○社告

●一冊十錢○每月一回發兌

東京小石川久堅町十一番地　新人社

立志獨立進步之友　成功

發刊滿一年の卷（第三卷第一號）十月十日發行

加藤弘之　名士の自助學　自助庵

砲王クルップ成功譚　村松樂水

現代青年と精神修養　井上文學博士

世界未來論　富豪カーネギー述

成功問題經過と余の本領　村上濁浪

青年と自信力養成　棚橋文學士

米國商業成功者森村君苦心談　原霞外

商業失敗の大原因　商業道人

平民音樂　島田三郎

本邦家屋改良談　醫學士山根正次

三千年前東西文明の媒介者　文學博士三宅米吉

英語と在米學生　中野力人

發刊滿一週年祝賀の一齊に見よ見よ祝を附す

日本民族の將來の活動界

朝鮮を始め支那米國　加奈

臺灣、南洋、北海、布哇、ブラジル等に於て業を爲んとする人の爲め旅費職業種類有望事業等を記せし

物六十餘頁の大附錄

定價　本號限金拾五錢　郵稅一錢五厘

每月一回本誌一冊十錢郵稅一錢六冊前金郵稅共六十錢全國新聞雜誌店賣捌

發行所　東京本郷區弓町一丁目電話下谷二三七一　成功雜誌社

櫻井義肇主筆　中央公論

中學罵倒論　女の馬鹿加減　有美

文藝評論

●一冊郵稅共●拾弐錢半年●分六十六錢●

反省社　東京本郷西片町十番地

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第五百二十三號
（明治卅六年十一月十日發行）（毎月一回十日廿五日）

市川團十郎の石橋（獅子）

ライオン齒磨

われ少き時、著作にとりて齒を大切にせず、一向に顧みる所ろなかりしかば、今にして既に此る齒の病ひあり。

（曲亭馬琴鹽石雜誌の一節）

ライオン齒磨

（明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY